

新刊批評

暉峻義等氏『人的資源研究』

と岡崎文規氏『國民生活と

國民體位』

南 亮 三 郎

(昭和十三年四月、千倉書房刊、癸判二九五頁)である。順序は標題に示す所と逆になり、又紹介に偏頗を來たす虞れはあるが、人口研究の上からは岡崎博士の勞作の方がより一般的であるので先づ『國民生活と國民體位』から始めよう。

二

『國民生活と國民體位』は「明治維新以來の我が國の産業の發展、人口の増加、生活水準の向上及び人口問題上並に社會問題上の各種の悩みと其の對策の概況を統計資料に基いて批判的に叙説したもの」(序二頁)で、明治以後の人口増加、明治以後の産業發展、我が國民の生活水準、人口問題とその對策、社會問題と社會事業、我が國民生活の將來、の六章から成つてゐる。取扱ひの範圍は廣汎であるに拘らず頗る要を得たる且つ適切なる敘述を各種の問題に與へて、透明なる理解を讀者に期し且つこれを果したる著者の心構へと手腕とは敬服に堪へぬところである。

第一章では「明治以後の人口増加」を統計的に説明し、「この増加の趨勢は全國に亘つて均等に現はれて

長期對戰の時局下において特に國民體位の問題が朝野の關心を集めつゝある折柄、二人の優れたる研究者によつてほぼ同一方向を目指せる二つの好著が相次いで現はれたのは慶ばしいことである。一は日本勞働科學研究所長醫學博士暉峻義等氏の『人的資源研究』(昭和十三年一月、改造社刊、四六判三九八頁)、二は彦根高商教授經濟學博士岡崎文規氏の『國民生活と國民體位』

暉峻義等氏『人的資源研究』と岡崎文規氏『國民生活と國民體位』(南)

ゐるのではなく、人口の増加率は、人口一萬以下の町村に於て最も少く、都市殊に大都市に於て著しく大である」こと、そしてこの大都市の膨脹は「一方その附近市町村の併合と、他方人口の都市移入によるもので」、都市産業の發展の結果として益々激しくなることの「都市に於ける人口の密集によつて、解決を要すべき住居問題及び人口問題が発生する」所以を指摘する（二六一—二七頁）。續く第二章は、右の人口増加と表裏の關係にある「明治以後の産業發展」の概観で、農業・工業・商業・交通業の各部門につき詳細な統計的觀察を興へる。讀者はこゝで明治以後の我が産業が各種部門を通じて如何に長足の——著者の繰返へす言葉では、如何に「驚歎すべき」——發展を遂げたかを學び得るのである。

第三章「我が國民の生活水準」は正にこの驚歎すべき産業發展が人口の側面と如何に關聯するかを説く部分である。著者はこゝで國民所得と賃銀指數との對照的考察から、「國民所得總額は明治三十三年より昭和五年に至る期間に於て名目的には約一四・五倍、實質的には約八倍の増加をなしてゐる」に對して「賃銀は

同一期間内に、名目的には約四倍半、實質的には約二倍半の増加を示してゐるに過ぎない」ことを指摘し、次の如き注意すべき論斷を興へる。曰く、「斯くの如く賃銀の増加率が國民所得の増加率に遙かに及ばないと言ふことは、増加せる國民所得が國民全般に對して平均的に分配されるものでないことを暗示してゐる。増加せる國民所得が國民の間に平等に分配せられるものでないとなれば、こゝに於て貧富の懸隔が生じ、設へ賃銀が名目的のみならず實質的にも増大するとしても、社會階級間に於て、之を相對的に見る場合、労働大衆の社會的・經濟的地位は低下の趨勢を示すものであると言はなければならないのである」（二一七頁）。かくて著者は労働大衆の生活内容を統計局の家計調査から探索しつゝ、「労働者階級は、文化の發達せる今日に於ても文化社會の領域外に追ひやられて、殆んど手より口への生活に終始してゐるのではないか」と説き、「我が國家を構成してゐる國民の一部が斯くの如き生活状態にあると言ふことは、肉體的に言つても、また精神的に言つても、國家全體の繁榮上まことに憂慮すべきことである。我が國の人口問題上及び社會問

題上の多くの悩みは、かゝる社會階級の間から主として發生するものであると言はなければならぬ。」(一五五頁)と論ずる。

第四章「人口問題とその對策」が主として人口統計上の「問題」であることは著者の専門よりして至極當然であらう。即ち先づ「人口自然増加の内容」を檢討して「最近、出生率が減少しつゝあるに拘らず、人口の自然増加率がなほ相當の高さを維持してゐる所以のものは、全く最近に於ける死亡率の減少に起因してゐるものと断定」し(一四三頁)、この出生率の減少に對して影響を及ぼしつゝあるものと思はれる「婚姻率の減少並に婚姻年齢の上昇が單に一時的現象ではなくて、持續する場合には、結局、人口の増加率は低下し、最後には現に歐洲諸文明國に於て悩みつゝある人口過少問題を惹起する危険は十分にあり」(一四八頁)と警告する。他方、我が國の高き死亡率、從つて短かき平均壽命に決定的役割を演ずるものとして、いまなほ高き水準を持續する乳兒死亡率を取り上げ、進みて乳兒の死亡原因を觀察し、以下結核死亡率、法定傳染病等の考察を重ねながら、本書標題の一半たる「國民

體位」の問題に移るのである。

第五章は「社會問題と社會事業」で、主として日本現行の社會諸施設に概觀を與へる。そして最後が第六章の「我が國民生活の將來」である。こゝで著者は立ち歸つて明治以後の人口増加を回顧し、その「驚ろくべき増加率」の原因は多元的であるけれども「主要原因は財貨の生産方法、生産技術並に經營手段の改善に基く生活資料の増加にあつた」(二八〇頁)こと、しかしこの増加せる生活資料の分配は「決して平等的のものではな」かつたので「有産階級と貧困階級との間の社會的地位の間隔は次第に擴大しつゝある」こと、——「こゝに於て一團の人間には生活不安の危機が迫り來たつてゐる。勿論、如何なる社會に於ても人類の社會生活に於て何等かの社會的困難の存在しない場合はないであらう。しかし我が國に於ては、近來、特に幾多の人口問題上、及び社會問題上の悩みを有つてゐる。これは凡て貧富の懸隔に原因してゐるとは言へないけれども、その中の多くのものは一團の人間に於ける生活不安に原因してゐると思はれるのである」(二八一頁)と論じ、かくて結局著者は、「最も重要なる

「人口」政策は國民生活の安定にある」と主張し、「凡ゆる社會層を通じて國民全般が十分なる榮養、適宜なる休息、必要に應じて適切なる治療を受けることが出來、また婚姻適齡期に婚姻し得る所の經濟的餘力を有つに於ては、幾多の人口問題上の悩みの少からざる部分は自ら解決されるものと思ふ」（二八四頁）と述べてゐる。

以上本書の梗概を記したが、これによると標題はむしろ『日本人口と社會問題』とでも稱した方がより適切であつたかも知れない。『國民體位』も説かれてはゐるが本書の全論述を通じての重點はむしろ、人口運動と關聯しての經濟社會の諸問題の解明に置かれてゐると思はれるからである。本書の評価も亦主としてこの點から行はるべきであらう。それにつけても一の感慨を禁じ得ざることは、本書の前半に克明に記すところの日本産業の「驚歎すべき」發展と國民大衆の生活水準との對照である。著者はそこで分配の「不平均」を指摘し、社會の富と國民所得との巨大なる増加にも拘らず國民大衆が依然として低き生活水準を彷徨してゐる様を描いてゐる。それはたしかに示唆に富む論述である。しかしながら他方著者は、本書から讀みとら

れるところでは、人口増加と産業發達との間の「交互作用」を信じ（三頁）、進みては人口量そのまゝをもつて「國家の人的資源として、またその活動力の源泉として」（二七九頁）見る人であつて、その「人口問題對策」の基本線も亦、放置すれば人口減退の虞れある出生率の近年の鈍りを如何にして食ひ止めんかとの方向に向けられてをることは前に見た通りである。この見解はしかし、かの國民大衆の依然として低き生活水準の事實と如何に關係づけらるべきであらうか。賃銀指數はともかく、國民生活の實質にして基本的上昇の認められない限り、出生率のより以上の増大を期待することは、すでに強き人口壓を更に一層重化する結果とはならぬであらうか。少くとも私共は、この生活水準の問題をめぐつて經濟的側面における日本「人口問題」の實體とその所在とへの、より一層立ち入つた解明を、本書の著者から期待したい氣がするのである。

三

次に暉峻博士の『人的資源研究』。これは改造社の「戰時・準戰時經濟講座第十一卷」として出されたものだけあつて、内容が私共から見れば非常に専門的

な、日本人口質の生物學的、乃至民族衛生學的研究に充てられてをるに拘らず、時局に對應しての著者の烈々たる氣魄が全卷から感得せられる。まことに、このやうな著者あつてはじめて「國民體位」の生物學的の研究は一國の政治的識見を動かし、やがて實踐にまでみづからを高め得るものと云へるであらう。

本書は上編「國家人的資源の涵養」と下編「人的資源の現状」の二編から成つてゐる。下編の諸章——即ち「國民の健康狀態」「國民の身體並に精神の發育能」「壯丁の體力」「國民の食糧消費」等々——は、謂ゆる人口質の具體的分析として有益なものである。しかしこゝではその内容に立ち入つてゐるわけにはゆかないので、主として上編の首章から著者の懷持する根本見解の一端を紹介するに止めたい。

「人的資源」とは何であるか、又それは國家・社會の發達の上に如何なる役目を演ずるものであるか。著者は「人的資源」を肉體的並に精神的な「國民の能力」と見、この能力をもつて「文化創造の基本的な動力」と解する。「一國の文化はその國民の能力の發展史である。従つて國民の能力こそはいつの時代、如何なる

時期に於ても國民生活の支配力であり、推進力である」(六頁)。然るにこの「國民の能力はその日常生活行動の主要部分としての職業的活動、一般に作業行動に於てこれを認識することが出来る」が、この作業行動は「國民が自らを、自らのため、家のため、社會公共のため、邦家のために役立たせようとする意志に基いて、その心身の能力を發揚する」といふ意味において、「作業行動は人格の表現」と見ることが出来る。(七頁)。「人間の行ふ作業行動が、その人格の表現であると云ふのは、作業行動の基底となるものは人その人の人格の構築であると云ふことである。人格の構築と云ふのは心身の働きを規定する基礎構築を意味するもので、それは具體的には人間の生物學的機構如何にかかつてゐると見るのが私の立場である。」(九頁)

さてかくの如き立場からは、謂ゆる「生産力擴充」「人的資源涵養」の問題は單なる人口量の問題とは考へられない。「數よりも質である。國民に内在する能力の問題を人口に關する主要問題として考へる時代になつたのである」(二頁)と著者は云ふ。何故であるか。——「一ヶ年に八十萬づゝ増加する人口をどうさ

ばいて行くかと云ふこと、即ちかくも増大する人口の自然増加の數をいかに處理してゆくかと云ふ事を人々は重大な問題として考へてゐるが、この大なる人口増加の基底には、既に人口の出生率を減退せしめる原因が有力に醸酵されつゝあることを見逃してはならない。増大する人口の内部には、既に人口減少の原因の一つとしての出生率の減少の傾向を見せてゐるのである。數の問題はこゝにも人口増加、否もつと根本的に妊孕能力と云ふ生物學的事實に當面せしめる。これは最早、數の問題ではなく、數の問題が質の問題に轉化することを意味する。即ち一つには出生率を増加せしめた國民の生活條件から、出生率を減退せしめ妊孕力の正當な自然な發揚を萎縮せしめ、内外の生活條件への轉化の過程それ自身が質的な意味をもつてゐるのである。二つにはこの出生率の減退はやがて近い將來に於て、或は人口の自然増加を減少し、或は之を停止せしめるやうな事になるかも知れない。この情勢に對應して、よく國民生活の發展に適應し國家の生産力を保持するためには、國民個々の心身の能力、作業能力の發達を更に一層に促進しその活用を高めその質を向上

するより外に最良の方策はないからである。」(一二頁) 然らば作業能力は如何にして昂められるか。「産業生産力に潑刺たる生氣を蘇へらせ、萎微せる勞働力に活氣を附與し、國民生活に希望と根柢とをもたらすためには、先づ吾々は第一着手として國民各個の生物學的構築を完全に、立派に作りあげる工作を進めねばならぬ」(一七頁)。そのためには「作業場での生産的活動は勿論のこと、作業場外での、自由時間に於ける勞働者の生活の向上を等閑に附してはならない。即ち言ひ換へれば、作業能力の向上は勞働大衆の生活の全面的な向上を計ることによつて初めて達せられる。生産事業場に於ける國民の生産的活動が何等も勞働大衆に苦痛の源泉とし、或は重壓として感得されず、寧ろ苦痛の代りに愉悅を、重壓の代りに國民的任務としての誇を感得するやうにありたいと思ふ。かくの如く勞働を組織し、かくの如く勞働を行ふことが國民全體が活力的な存在となる前提條件である。」(一九—二〇頁) 著者はなほ次章において「國民體力の概念」を再説し、教育の本質的な問題は、「父祖傳承するところの遺傳的財産をして、それが最上の作業能力を發揮し國

民全體が全面的に活力的存在であり得るやうに發達を可能ならしめること」にある點を指摘し(四一頁)、次の如き剴切なる論述を與へてゐる。曰く、「ある工場では疲勞回復の名の下に、或は作業能力増進の名の下に、疲勞し、生氣を失つた労働者が強制的な體育を就業時間外に課せられてゐる。體育は生命の喜びをもたねばならぬ。喜びを體驗し得ぬ體育は體育ではない。體育にあらざる體育によつては作業能力の増進は期待し得ない。また榮養状態の不良は精神萎縮を來たす。榮養の不給は精神の萎縮である。精神の萎縮するところに體育の喜びを喚起することは困難である。不良榮養と榮養不給はまづそれから改善しなくては作業能力の發達は不可能である。適正なる榮養は適正なる環境である。その正しき環境の下にのみ體育の振興、作業能力の發達は可能である。」(四三頁)

上篇のうちにはなほ、著者の持論たる「義務教育年限延長の科學的論據」が第三章に收められてゐる。これは「少年少女ともに十六歳にならなければ、安んじて外的労働のためにエネルギーを使用出来ないこと」(七一頁)を立證し、六年制の現行義務教育を終つて十

二、三歳の幼けなさで生産労働に従事するのは「生命の浪費であり、生活の破綻である」(九六頁)ことを主張したる力篇であるが、下編の諸章とともに委細は讀者の研究にゆだねる。著者の立場と識見とは、ほど前掲の紹述に表明されてゐると思ふからである。

とはいふものの、本書における研究方法が「生物學的」であればあるほど、私共の評價範圍から益々遠ざかりゆくの外はない。私共はたゞ著者の永年にわたる熱心なる研究と、勞作を通して感得せられる憂國の熱情とに心打たれるのみである。けれども讀後の感慨はないわけではない。人口問題研究の枠内にあるものとして本書を見ると、まさしくそれは人口質を、「國民資質」を、取扱うたものではあるが、著者はこれを重視するの餘り、他の一面たる人口量の問題を消去するが如き態度を表明してゐる。生物學的な質の問題は重要であるに相違なく、又さればこそ「國民體位」の問題が朝野の最大關心事の一つとなつてゐるのではあるが、従來多くの學者が經濟的側面から論じ來つたところの量の問題もなほ依然としてその重大さを失ふものではあるまいと思ふ。出生率の微弱化の傾向はす

に日本に現はれてゐるが、しかし人口の増加はすでに停止したといふのではなく依然として強大なる増加を遂げてをり、そして將來なほ一層、ヨーロッパの水準を目指しての死亡率の克服が企圖せられるならば日本人口の自然増加は——出生率が現在の趨勢を持続するとしても——少くとも或る期間は益々促進せられるものとも豫想され得る。然らば即ち、この増加する人口を如何に養ふべきかといふ量の問題が、より一層切實に考へられねばならなくなるであらう。

私はかつて小著『人口論發展史——日本に於ける最近十年間の總業績』（昭和十一年、三省堂刊）の中で、生物學者・社會學者の側よりする人口問題研究の諸成果について次の如き述懐を洩らした。それは直ちに以て暉峻博士のこの新著に當てはめ得るものではないが、右に指摘した著者の一般の見解についてのみならず個々の論策を通じてもなほ、ほど相似たる感慨をいだくを禁じ得なかつた。小著はかう記してゐるのである。

「まことに同じ一つの問題は、理論的には一應個々別々の見地から相互に何の關聯もなく説き進められていゝ。しかし實踐的に何らかの態度を一國の人口増減に

對して採らうとする場合には、理論的考察に際して除斥したる他の諸見地をも併せ考慮に入れねばならぬ。無條件的な人口増加の禮讚は、よしんば西歐諸國の人口現象が彼等の將來に『暗影』を投げかけつゝあるとしても、又よしんば『生物學的』『社會學的』研究がかゝる現象の必然的到來を他の諸民族について豫測せしめるとしても、その増加人口が果して又如何にして扶養され得るかといふ見地、一言にして經濟的見地を顧慮することなしには、畢竟、空に向つて嘯く——然り民の生活とは無關係な空語、たるに過ぎないであらう。經濟學的人口論者はたしかに生物學的、社會學的研究所産に疎い、だがそれ以上に生物學者、社會學者及び政治論客は經濟學の見地を等閑に附してゐる。——これらの諸見地を綜合しての人口理論と人口政策との樹立、少くともその樹立への方が、次の十年間に現はれて來て欲しいものである。」（小著、二二六—二七頁）

但し若し、これらの蕪雜なる記述が過まつて『人的資源研究』の品位を不當に傷けることともなるならば、筆者はふかく自からの非禮をお詫びせねばならぬ。（一九三八・五・二二）